

「学校が見える・地域が見える・子ども姿が見える」新聞づくりを目指して

山形県鶴岡市立大泉小学校教諭

松浦 磨理子



山形県鶴岡市立大泉小学校の学校新聞『大泉仲よし新聞』は、『全国小・中学校・PTA新聞コンクール』で、昨年の理想教育財団賞に続き、今年は文部科学大臣奨励賞を受賞するなど、3年連続して上位入賞を果たしています。伝統に支えられてきた同紙は、今年度には、200号の発行が予定されており、児童会活動の一環であるだけでなく、地域の住民にとっても大切な存在となっています。子どもたちの自主性を尊重することで意欲的な活動を行っている同校の新聞づくりの様子をお伝えします。

白山だだちゃ豆の里・大泉

山形県鶴岡市立大泉小学校は、映画「たそがれ清兵衛」の原作者、藤沢周平の生まれ故郷として知られるようになった鶴岡市の西部に位置している。学校の建つ大泉白山地区は、農村地帯で山形県有数の米どころでもあるが、昨今では「白山だだちゃ豆」の本場としても名を広めている。

本校は、昨年度、創立130周年を迎えた歴史のある学校であり、1学年1クラス、全校児童168名の中規模校である。

学校新聞「大泉仲よし新聞」も、今年度には200号の発行が予定されており、歴代数々の賞を受賞した伝統ある新聞である。創立以来の伝

統に支えられてきた新聞教育に対する地域の関心も高く、協力的である。

伝統を受け継いで

「大泉仲よし新聞」は、児童会の委員会活動の一つである新聞委員会

の児童によって制作されている。新聞委員会は4・5・6年生の各クラスから選出され、今年度は20名の児童で構成されている。

3年連続して新聞委員になっていく児童も多く、上級生から下級生へと新聞づくりのノウハウがしっかりと受け継がれている。先輩たちの築き上げてきた輝かしい実績と伝統を誇りに思っており、毎年、「昨年よりも良い新聞をつくってほしい」という意識が強く芽生えているようである。

発行は、年3回のタブロイド判を基本とし、1学期は2面、2・3学期は4面構成になっている。その間、年間30号程度を目標に、B4判の「三二大泉仲よし新聞」を校内印刷で発行し、できるだけそのときの話題を逃さずに伝えられるように頑張っている。

つくる以上は全力で

学校週5日制の実施に伴い、新聞づくりの活動時間の確保が難しいといわれてきたが、本校においても状況は厳しい。加えて、今どきの子どもたちは本心に忙しい。新聞委員として例外ではない。放課後は、各学級の活動があり、スポーツ少年団の活動があり、なおかつほとんどの児童が複数の習いごとを抱えている。そうした中で本校の新聞委員会の活動を支えているのは、次の3点によるところが大きい。

新聞委員一人ひとりの意欲
まず、新聞委員になりたいという

はつきりとした意志を持って委員会に入ってくる。そして、新聞づくりは大変だが楽しい、好きだと言っている。だから、「つくる以上はよりよいものを目指そう。同じ苦勞をするなら、自分自身で精一杯頑張ったといえる仕事をしよう!」というこちらの要求にもついてきてくれる。

このような児童が3年間新聞委員を続けてくれるのだから、指導する側にとってこんなありがたいことはない。指導者の意欲まで引き出してくれるといっても過言ではない。

一人ひとりの実情に合わせた活動時間が無い以上、全員集合の新聞づくりにこだわることはやめた。本校での委員会活動の設定は、月に1、2回である。その中で新聞を仕上げることなど土台無理である。

正規の時間は、編集会議を行い、発行計画の確認と内容・分担の打ち合わせの時間とした。記事の担当を決め、発行日とそれに伴う記事の締切日を確認すると、あとは個別の活

動になる。各自が締切までの範囲内で、取材に行き、下書きをし、記事を完成させる。自分が活動しやすい日時を選んで新聞づくりに取り組めるようにしたいと考えたからである。もちろん、記事完成までの各段階ごとに、指導者に見せてアドバイスをもらった上でのことだが。

正直なところ、このやり方は少々勇気が必要だった。これは、全員が一人でもきちんと記事を仕上げられるという前提のもとに成り立つ活動だからだ。そのため、下校の際の顔出し、挨拶作戦も同時に行った。毎日顔を合わせることで、自分の仕事を忘れることもなく、困ったときにも相談しやすいのではないかと思ったからである。

学校・地域あげての協力体制
 学校新聞は新聞委員ただだけが努力してもできるものではない。記事に値するだけの取り組みが学校全体でなされていることはもちろんのことだが、記事を書く際の取材相手の協力がなければ仕上がらない。
 「ミニ大泉仲よし新聞」は、月々、3回は発行するので、当然取材回数も多くなる。学校全体にアンケートをお願いすることも多い。申し訳ないことに急なお願ひも決して少なく

「第53回全国小・中学校PTA新聞コンクール」文部科学大臣奨励賞受賞の喜びを伝える「ミニ大泉仲よし新聞」(第29号)(平成16年3月17日発行)



ない。しかし、地域に取材に出かけても、学校でのインタビューでも、いつでも快く応じてもらえる。忙しい時間を割いて協力を惜しまず、「大変だの。頑張れよ」と励ましの声をかけてくださる。
 また、新聞委員の家庭でも、活動で遅くなったときのお迎えはもろろんのこと、できあがった新聞を見て、「すごい。頑張ったの」とほめ、



第30号は卒業式の記事をトップで紹介(第29号と同時に発行)



編集会議は、全員が顔をあわせる貴重な時間



夏休みの豆記者講習会にてやる気まんまんの子どもたち

取材風景。地域の方たちの協力が新聞づくりを支えている



記念だからと大事に新聞を取っておく家庭も多い。

新聞の伝統校ということで、実際に自分が新聞づくりをしてきたという方も多く、新聞づくりが大変なのは当たり前、新聞づくりに関わることは良いことだという風土があるといつてもよいかも。これは良い意味で、新聞委員たちにプライドを持たせてくれる。プライドのある新聞委員は、いい加減な仕事はないものである。

試行錯誤の実践の中から

大泉小学校に赴任するまで学校新聞づくりに全く縁のなかった私にとって、伝統を引き継ぎ、新聞委員会の活動を円滑に、より活性化させていくことは、すべてが手探り状態だった。そうした中で現在も心がけている点を箇条書きにしてみる。

学年単位で活動

「ミニ大泉仲よし新聞」については原則的に6年生→5年生→4年生のサイクルで学年班ごとに活動している。縦割りのグループで教え合えば一番良いが、学年単位で取り組めば相談の時間が取りやすく活動しやすい。ただし、6年生がサポート役として4・5年生にはついていく。

一人ひとりに責任感と満足感を個性を伸ばすという考えで得意な分野を分担してつくる方法もあるが、1人1記事、署名入りで仕上げることが原則としている。また、校内印刷の「ミニ大泉仲よし新聞」を

気張らずに1年間続けていくことで、必ず力がつき自信につながっている。

足跡を残す

大きな賞を受賞しても一人ずつに賞状がいただけるわけではないので、1年間の全新聞と賞状、活動の様子の写真などを加えた縮刷版を手づくりし、新聞委員や各学級に配布している。翌年にはそれが資料の役割も果たしている。

オピニオンリーダーとしての意識づけ
年度当初に1年間の方向づけについて話し合い、年間のテーマや特集について見通しを持たせるようにしている。児童会の取り組みについては毎掲載せ、児童会活動の一環としての新聞づくりであることを念頭におかしている。

楽しいからこそ継続できる

大泉小学校の新聞づくりのモットーは、「学校が見える・地域が見える

・子どもの姿が見える」ことである。そのため、タブロイド判の「大泉仲よし新聞」は学区の全家庭に配られ、「ミニ大泉仲よし新聞」は校内で配布する他、各地区の公民館に掲示していただいている。配布も新聞委員や6年生の児童自身の手で行われているので、地域の方から直接声をかけていただくことも多い。

読み手の反応は、そのまま新聞づくりへの意欲に反映される。楽しく新聞づくりに取り組む子どもたちの姿があつてこそ、伝統は引き継がれていく。苦勞が喜びに変わる新聞づくりの手ごたえを感じている子どもたちとともに、さらに読み応えのある新聞づくりに励んでいきたい。



1年間の活動を1冊にまとめた縮刷版